

佳作

自信と挑戦

宮城県仙台市立折立中学校

2年 和田 実想

「自信」。それは、今まで私に一番足りていなかった感情だ。

私の中学校生活は「少し変わった」スタートをした。真新しい制服に身を包み、1年生の教室へ足を踏み入れる。それはみんな同じ。私が唯一みんなと違う点といえば「友達が一人もいない」ことだ。だから入学式初日はすごく不安で、一人緊張していたのを1年半経った今でも鮮明に覚えている。その日私は「友達をつくらなきゃ」とずっと思っていた。一人になるのが怖かったからだ。

幸い、初日から「友達」と呼べる存在はできた。ただ時が経つにつれ、だんだん共通の趣味を持つメンバーでグループが形成され、私はいつしか孤独になりかけていた。入学式から1カ月が経って、やっと波長の合う「友達」ができ、私はその友達と1年生の1年間を過ごした。

やがて、中学校に入り2度目の春が来た。年に1度のクラス替え。クラスのメンバーは半分以上が替わった。また、1年生の1年間を共に過ごした友達とはクラスが分かれてしまった。私はある意味、振り出しに戻ってしまったのである。昨年同じクラスだった話せるクラスメートは数人いた。私はそのクラスメートたちと過ごそうと試みた。だが、そのクラスメートは小学校時代の友達と小学校の頃の話をしてきたため、中学校から一緒になった私は、その話の輪の中に入っていけず、最も恐れていた「孤独」になりはじめた。

そしてついに「孤独」が耐えられなくなり、私は学校に行かなくなってしまう。その日から徐々に私は壊れていった。面白くても笑えず、悲しくても泣けず、好きなものにすら興味を示さなくなっていた。学校にも行かず、家にいても何もやる気の起きない日々。そんな色もなく、モノクロのような日々。「生きる意味」すら分からなくなっていた。小学校から3年間追いつけてきた夢も諦めようとした。

私の将来の夢は「いつか憧れを持ってもらえるような小学校教師になること」。この夢は小6のときに見つけ今日までずっと追いつけてきた。なりたいと思ったきっかけは、その当時の担任の先生の影響だった。一人の先生としても、一人の人としても先生は愛され、尊敬されていた。その瞬間、私の将来の夢は見つかったのだ。その先生は卒業式の日、

「いつかあなたが夢をかなえていることを願っています。」

と、言ってくれた。なのに私はそのことを忘れ、この夢を、今までの努力を水

の泡にしようとした。「諦めたい」という弱い感情に支配された。それを聞いた母は、

「そんなんで諦めていいの？ そんなに簡単に諦めていい夢なの？」
と言った。やっと気づいた。「逃げてはダメ」ということにも「簡単に諦めてはダメ」ということにも。私はこの時の母の一言がなかったら「今」夢を追い続けていないと思う。

そこから、改めて夢を再確認した私は「中学校2年生、2度目のスタート」を切った。不安を抱えながら別室ではあるが、毎日通い、調子が良い時はさらに自分のクラスにも行くようにした。クラスに行くのは当たり前ではあるが、私にとっては「一つの挑戦」だった。それから少しずつクラスの雰囲気にも慣れ、思い切って自分からクラスメートに話しかけた日もあった。最初はお互い緊張していたけれど「合唱コンクール」というクラスで挑む大きな行事を通して、話せるクラスメートが増えた。そして「学校が楽しいと思う瞬間」もできるようになった。たった「一つの挑戦」が私をどんどん変えていった。できることが一つ増える。クラスメートが話しかけてくれる。クラスに行ける。そんな当たり前が、すごく嬉しかった。「嬉しい」と思った瞬間、私は「自信」に満ちていたはずだ。

「自信」という言葉の意味は「自分の価値、能力を自ら信じること」。私が挑戦できたのは「自分を信じることができたから」。自分を信じることができたのは「どんな小さなことでも挑戦していったから」。どちらか一つが欠けたらできない。簡単そうに見えてこの気持ちを持ち続けるのは難しいはずだ。だからこそ、これからは「自信を持ち続けるため」に挑戦をする。「挑戦し続けるため」に自信を持ち続ける。そしていつか夢をかなえ「私みたいになりたい」と尊敬してもらえるような「夢を与える人」になる。